

国語の朗読学習におけるデジタル ポートフォリオ評価の実践

茨城県つくば市立竹園東小学校 よしだひろし
吉田浩

1 はじめに

今、教育界では、子ども達に身に付いた力をどう評価するか課題になっている。

ペーパーテストなどで評価できるものもあれば、そうでないものも多い。特に、総合的な学習においては后者である。しかし、総合的な学習に限らず、ペーパーテストなどで評価できないものの方が多いのではないだろうか。

国語の朗読学習などもそのひとつであると考える。自分の朗読がどれだけ進歩したか評価するのは難しい。教師はある程度評価できても、子どもたちがよくなったという実感が持てないのである。例えば作文であれば、下書きの段階と清書の段階の作文を読み比べれば、どういったところがどのように進歩したのか、子ども達はじっくり評価ができる。しかし、それが朗読となると、以前の朗読と現在の朗読とどの部分がどのように進歩したのか、比較しにくいし、進歩したという実感がつかみにくい。

以前、カセットテープで何回も朗読を録音して、それらを比較して評価させたこともあった。しかし、それだと評価をするのに、何回も何回も巻き戻しをしたり、手間がかかる。また、評価はノートやプリント、記録はテープに残させるために、後で年間を通してどう変容したのか評価するのは苦労があった。これらの情報を何とか一元化できないものだろうか。一元化できれば評価もしやすくなるのではないだろうか。

そこで、これらの問題を解決する方法として、ネットワーク、デジタル機器を利用し、学習に活かす評価をすること（デジタルポートフォリオ評価）を、国語の朗読学習に導入した。

2 デジタルポートフォリオとは？

最近、総合的な学習の評価方法として注目されているのがポートフォリオである。そのポートフォリオは、学習の過程や結果に関わる様々な成果物を、目的、計画的に、ノート、バインダー、フォルダ、箱などに入れて保管する。

それに対して、デジタルポートフォリオでは、成果物をコンピュータにデジタル情報として取り込み、ハードディスクやCD・Rなどのメディアに入れて保存する。

デジタルポートフォリオ評価は、子どもたちにデジタルポートフォリオづくりに取り組ませ、その活動を通して自己評価や相互評価を行わせたり、先生による評価もそれを手がかりに行おうとするものである。

3 研究の方法

5年生の国語で学期に1単元、朗読の活動の時間を設ける。

単元の中で、最初の朗読、練習した後の朗読を、デジタルカメラの動画（MPEG映像）で撮影して、グループウェアソフトのデータベースに入れる。このグループウェアソフト

のデータベースをデジタルポートフォリオ（入れ物）として活用する。ポートフォリオに入れた朗読を何回も何回も再生して聞き直し、評価規準表（資料1）を活用しながら、どんなところが伸びて、どんな課題があるのかを評価させる。

3学期に、1学期から3学期までの朗読の記録を再編集し直し、1年間でどういったところが伸びたか比較し評価させる。

4 研究の実際

(1)「11本目のポプラ」

東京書籍5年国語の朗読学習

「自分の朗読を聞いたことがある人は？」という質問に対して「ある」と答えた子どもは一人もいなかった。全員の子もたちが、自分の朗読を聞くという経験がなかったのである。

活動の手順、子ども達の反応は下記の通りである。



写真1 / 朗読をデジタルカメラの動画で撮影

朗読をデジタルカメラの動画で、友達に撮影してもらった。（写真1）

子どもたちは、デジタルカメラでの動画の撮影は、初めてということもあって、意外と簡単に朗読の映像が撮影できることに驚いていた。

その朗読の動画を、デジタルポートフォリオに入れた。

この活動は、フロッピーディスクに撮影をしているので、フロッピーディスクをコンピュータに入れて、簡単な操作をするだけで入れることができる。

その朗読の動画を何回も何回も開き、聞き直し、よくできている部分、これからよくしたい点について評価をした。カセットテープと違って、巻き戻す手間がなく、クリックするだけで、すぐに何回も聞き直すことができるので便利であった。

児童の反応は、自分の朗読を再生して、「こんな声で聞こえると思わなかった」「こんなに下手だったの？」「声が小さい」「はっきり発音できていない」などの評価が多かった。ほとんどの児童が自分が思っていた朗読と、実際に自分で聞く朗読は違ったようだ。

自分の朗読を聞いて、自分の目標を設定した。マウスでクリックするだけで自分の朗読が再生できるので、何回も何回も聞き直しがしやすく、自分が「こうしたい」という部分を見つけやすかった。

目標に向けて練習を積んだ。練習中も、デジタルカメラを使い自分の朗読を撮影してもらい、何回も何回も納得いくまでチェックしていた。

上手になってきたら、自分が最高だと思う朗読を、また、デジタルポートフォリオに入れた。撮影しても、自分で納得がいけない場合には、何回も撮影をし直した。

今回の朗読と、最初の朗読と聞き比べて、どこがどのようによくなったか、また、次の課題は何なのかをつかんだ。これも、再生がしやすく何回も何回も聞き直したので、どこがどのように伸びたのかつかみやすかった。

また、今回は全員の子が、自分の朗読を初めて聞く経験をしたので、自分の朗読がどういうものかを実感したのは大きかった。

(2) 大造じいさんとガン

東京書籍5年国語の朗読学習

前回の「十一本目のポプラ」では、自己評価のみの評価であったが、今回は友達同士による相互評価をする活動も入れた。

活動の内容、子ども達の反応は下記の通りである。

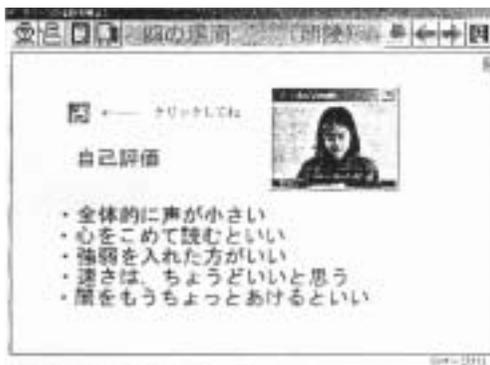
「十一本目のポプラ」の朗読の評価の経験も活かして、朗読で登場人物の気持ちを聞き手に伝えるためには、どのような表現の工夫が必要か話し合い、工夫を列挙して

目標を全員で確認した。

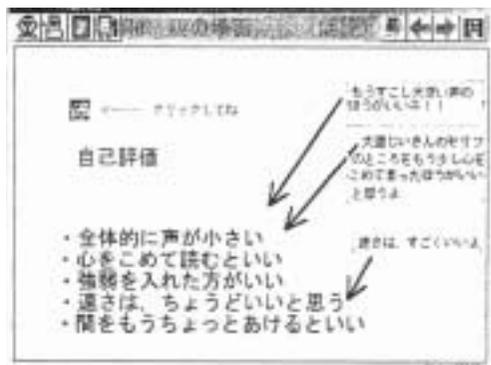
自分の朗読を友達にデジタルカメラの動画で撮影してもらい(写真1)、映像をデジタルポートフォリオに加えた。そして、映像を何回も再生して自己評価をした(資料2)。その際に、評価の観点が曖昧にならないように評価規準表も活用する。子どもたちは、2回目ということもあり、評価のポイントもつかめているために、1回目よりは評価がしやすかった。

評点	判定規準
5	強弱、速さ、間の取り方、声の大きさ、上げ下げに気をつけて読んでいる。登場人物の気持ちやその変化、情景に気をつけて読んでいる。
4	強弱、速さ、間の取り方、声の大きさによく気をつけて読んでいる。登場人物の気持ちやその変化、情景を聞き手によく伝えている。
3	強弱、速さ、間の取り方、声の大きさの、どれか一つに気をつけて読んでいる。
2	強弱、速さ、間の取り方、声の大きさの、どれか一つに気をつけて読んでいる。
1	ぼう読みをしている。

資料1 / 評価規準表



資料2 / 自分の朗読を聞いての自己評価



資料3 / 友達からの相互評価

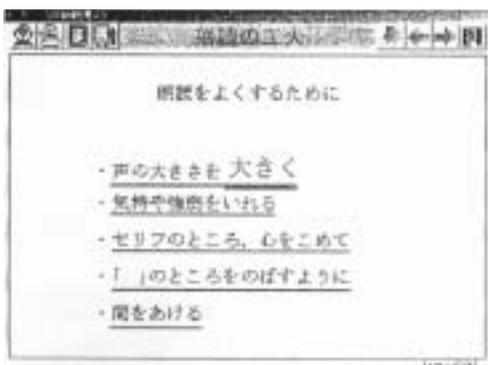
ネットワークで公開して友達に聞いてもらい、意見やアドバイスをもらった(資料3)。ネットワークを使って、自分のクラスだけでなく隣のクラスの友達、あるいは共同学習の交流校の児童にも、自分の朗読を聞いてもらい意見を幅広くもらった。

朗読学習の相互評価も初めて行ったが、マウスでクリックするだけで、何回も聞き直せるので、評価がしやすかったようだ。

ただ発表をさせて評価すると、聞き逃したらそれで終わりになってしまうが、この場合、気になるところを何回も何回も聞き直せるので、細かなところにこだわって評価ができた。

また、ビデオメールを使うことで、他の学校の児童や単身赴任で遠く離れて暮らしているお父さんなどからもアドバイスをもらった児童もみられた。

自己評価や友達のアドバイスなどを参考に、自分の目標を設定した。今回は、相互評価も入れたので、友達の意見を参考に、自分の目標を設定する児童が多かった。(資料4)



資料4 / 自己決定(目標の設定)

自分の目標を達成するために、何回も何回も練習を行った。その際、自分の朗読の上達の様子を確認するために、デジタルカメラを利用した。また、直接友達に聞いてもらい進歩の様子を確かめる子どももいた。デジタルカメラを使ったり、直接聞いても

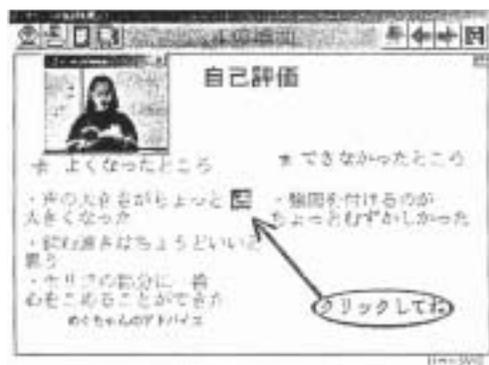
らったり、工夫して子ども達は、自分の目標達成に向けて、学習活動をしていった。

自分が納得できる朗読ができれば、友達に朗読の動画を撮影してもらい、映像をポートフォリオに加えた。

映像を再生して、練習の成果を確認し、伸びた点について評価した。(資料5)

また、今回は、これらの活動の記録を、ポートフォリオにどう入れるか工夫をした。前はただ記録を残すだけであったが、今回は学びの様子をポートフォリオに時系列で入れた。(資料2から資料5) そのことにより、子どもがどんな学習活動をして、どんな伸びを示したのかが分かりやすかった。

そして、これらを、保護者にも面談時に公開することで、子ども達の学びの様子、成果について具体的に分かりやすく説明することもできた。



資料5 / 更に練習し直した朗読を聞いての自己評価

(3)「注文の多い料理店」

東京書籍5年国語の朗読学習

(2)の実践と同様な流れで、3学期にも「注文の多い料理店」の単元で朗読学習を実施した。

前回までは、個人での朗読であったが、今回はグループで実施した。

このような形態の学習も3回目ということもあり、子どもたちは、活動の見通しも見えており、評価の観点をしっかり押さえて評価をしたり、またより細かな目標を設定することができた。

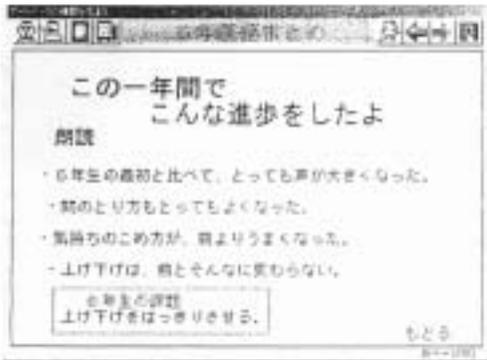
(4) 1年間のまとめ

3月に全単元で学習したことを、ひとつのデータベースにまとめた。その中で、朗読の記録もまとめた。これは、デジタルだからこそできたことである。これが普通のポートフォリオやノートでは、朗読の記録を綴ることはできなかった。

そして、子ども達は、1学期「十一本目のポプラ」、2学期「大造じいさんとガン」、3学期「注文の多い料理店」の3つの朗読を比べて、この1年間かけて、どんなところが伸びて、どんなところが今後の課題になっていくかの評価をした。

その結果、全員の子どもたちが一人一人の朗読で、どのようなところがどのように伸びたか、実感することができ、評価をすることができ、また次年度の目標も立てることができた。(資料6)

また、教師にとっても、一人一人の児童が



資料6 / 1年間の記録を聞き直しての評価

どういふ変容が見られたか評価することもできた。そして、これらを保護者に面談時に公開することで、保護者も、1年間で朗読をする力がどのようについていったか実感することができた。

(5) 次年度の活動

現在6年生になった子ども達を、今年度も担任している。引き続き、学期に1回同様の活動の時間を設け、5年生のときと比べてどのように進歩したのか評価をさせている。5

年生のときの朗読もすぐに取り出せるので、子ども達はすぐに過去のものと比較をすることができる。3月には、今度は2年間の活動を振り返って、この2年で、朗読をする力がどのように伸びたか評価させたい。また、デジタル情報として残してあるので、これらを卒業時には、CD・Rに焼いて持ち帰らせる予定である。

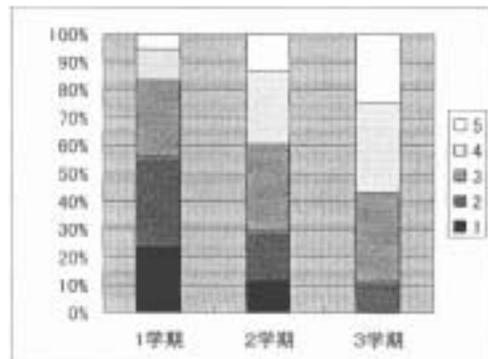
また、現在5年生も同様の学習を行っているが、ネットワークの中に、これらのデジタルポートフォリオが残されているので、この子どもたちが学習したことを参考に朗読学習を行っている。

5 | 研究の成果と課題

(1) 成果

ネットワークやデジタル機器を工夫して活用することで、今まで評価しにくかったもの(朗読など)が、子どもたちにとっても教師にとっても評価しやすくなった。

デジタルポートフォリオに残した、朗読の動画の記録を何回も聞き直すことで、自分の長所や短所をつかみやすくなり、自分の朗読を改善し、進歩させることができた。これは子ども達の自己評価の変容(資料7)を見ても、自己評価の4や5の割合が3学期になればなるほど増えていることから分かる。



資料7 / 児童の自己評価の変容

自分の伸びがつかみやすく、実感しやすいので、子どもたちも、自分の朗読をよくしようという学習意欲も向上した。

次から次へと自分の課題もつかみやすいので、子どもたちの学習がより主体的になった。

ふつうのポートフォリオ評価にはない、デジタルポートフォリオ評価の利点について実証できた。デジタルポートフォリオ評価の利点は次の通りである。

- 活動表現を映像や音声で記録できる。
このような朗読のような活動を評価できたのも、デジタルポートフォリオならではのことである。普通のポートフォリオではできない。
- 再編集ができる。
ハイパーリンクを工夫して使うことで、一度まとめたものを編集し直すことができる。
- 閲覧が容易にできる。
デジタルポートフォリオを校内のネットワークに入れることで、特別な機会を設けなくても友達のものを見る機会が増え、相互啓発に基づく学習を促進できる。
- 場所をとらない。
普通のポートフォリオだと、子どもたち全員分の活動の過程や評価の記録を残すと、置き場所に困るが、デジタルポートフォリオは、全部デジタル情報にするので場所をとらない。数年分残しても何ら困ることはない。

(2)課題

評価規準についてまだ曖昧な点があるので、評価規準の作り方をきちんと明確にしていけば、より一層良い学びができるのではないだろうか。

朗読の学習だけではなく、体育の実技、音楽の楽器の演奏や歌を歌うことなど、様々なところで、このデジタルポートフォ

リオ評価の利点を活用できるのではないだろうか。

この学習活動を繰り返すことで、総合的な学習の中のプレゼンテーション能力の評価にも活用できるのではないだろうか。

この3点を今後立証していきたい。

6 最後に

新教育課程の学習では、「児童生徒が自らの学習過程を振り返り、新たな自分の目標や課題をもって学習を進めていけるような評価を行うこと」が求められている。

今、総合的な学習の評価方法として、ポートフォリオ評価が注目を浴びている。その考えと、デジタル機器やネットワーク、コンピュータの長所を組み合わせれば、総合的な学習はもちろんのこと、各教科の学習でも、今まで評価しにくかったものも評価ができ、子どもたちの学習がなお主体的になっていくのではないかと思う。